

神戸大学大学院農学研究科地域連携センター H24 年度 活動報告書



目次

はじめに	1
H24 年度事業内容	2
Ⅰ 地域共同研究	
Ⅱ 地域交流活動	
Ⅲ 相談情報発信	
組織体制	12

はじめに

■ 地域連携センターの役割

中央政府を中心に進められている地方分権改革は、地域の特性に即した「まちづくり」が可能になるというメリットを照らしだす一方、地域間格差の拡大というデメリットも内包している。こういった流れを受けて、それぞれの地域が自らの資源を発掘し、地域の発展につなげるためにさまざま努力をしている。

そうしたなか、大学は知の提供をとおして、地域の発展に貢献するべく、産官学連携の促進に力を入れ始めている。神戸大学では、そういった流れに先駆けて、連携創造本部及び地域連携推進室を中心として地域社会との連携を進めてきた。

農学研究科地域連携センターは、地域と大学をつなぐ拠点となり、地域からの多様なニーズを共同研究プロジェクトに繋げたり、農学研究科・農学部の教員や学生と、地域の住民やNPOが一体となった交流活動をサポートしたりと、大学と地域を結ぶ中間支援組織（インターメディアリ）として活動を続けている。

農学研究科の学問分野は、日本の農業だけでなく、世界中の人々の暮らしと何らかの形で関わっている。また、日本の農村地域は、生活の知から農業技術まで、様々な知にあふれている。

農学研究科地域連携センターの使命は、1) 農学研究科が有するあらゆる知をもって、地域の課題解決に貢献すること、2) 大学生および地域の人々に、現場での経験に根ざした学習の場を提供すること、そしてその交流の上で、3) 新しい知を創造し、世界と日本の地域の内発的な発展に寄与することである。

■ ごあいさつ（地域連携センター長 高田 理）

農学研究科地域連携センターは、大学が保有する知識や技術を農山村地域の問題解決に活用し、地域社会の発展に貢献することを目的として、H15年に創設されました。主に次の3つの活動を実施しています。1つは、地域共同研究です。地域が直面している食料・農業・農村問題を解決し、地域がより発展するための調査研究を自治体、NPO、住民などと共同で進めています。2つは、地域交流活動です。フォーラムやワークショップ、学習会などの開催を通じて、地域と農学研究科、本センターとが相互理解するとともに、知識を共有し、地域の発展につながる活動をしています。また、地域との交流を通じた実践型の学生教育にも取り組んでいます。3つは、相談・情報発信活動です。農学研究科と地域をつなぐ窓口として、共同研究や地域の問題に関する相談に応えるなど、研究や活動における事務局業務をしています。また、ホームページなどを通して、最新の情報を発信しています。

H19年に農学研究科と篠山市との間で地域連携協定が締結され、さらにH22年には、これまでの連携協定を発展させ、全学を対象とした大学協定が締結されました。H18年に開設された篠山フィールドステーションを拠点に、本センターが中心となって全研究科・学部と篠山市とこれまで以上の地域連携活動を展開しています。（なお、これらの活動をしていくために、篠山市から財政支援も受けています。）

前述の活動は主に篠山市と行われていますが、篠山市以外にも、本センターが認定、助成したサポート事業もあります。本『活動報告書』は、平成24年度に本センターが実施したこれらの活動を取りまとめたもので、本センターの活動の理解を深めていただく一助となるとともに、地域の発展に役立てば幸いです。



H24年度の事業内容

I 地域共同研究事業

地域のニーズや農学部シーズに基づき共同での調査研究をおこなう。

II 地域交流活動事業

地域と農学部で知を共有し、実践活動をおこなう。

- 1) 地域連携研究会（A-Launch）の開催
- 2) 学生地域活動サポート事業
- 3) 農村地域学習ネットワークの構築
- 4) 鹿児島カレッジへの参加
- 5) 国際地域連携ネットワークの構築
- 6) 加西市、三木市等との包括連携推進
- 7) 食農コープ教育プログラム支援事業

III 相談・情報発信事業

地域と農学部を繋ぐ窓口として、情報の受発信をおこない各種相談に応じる。

- 1) ホームページ等による情報発信
- 2) オフィスアワーの実施
- 3) 講演

I 地域共同研究

地域のニーズや農学部シーズに基づき共同での調査研究を推進している。平成16年より、地域自治体や住民団体、NPO、協同組合等と協働で実施し、地域発展に寄与する研究を、農学研究科地域連携センター共同研究として認定、実施している。

また、今年度は、「地域共同研究公開サポート事業」を新たに実施した。地域の課題解決・価値創造などを地域と共にすすめる地域共同研究等の周辺サポートおよび、地域連携研究等の収集整理と情報公開（学内、地域、国際）の促進を目的としたものである。支援の内容は、取り組みの一般公開や地域との情報共有、セミナー開催、PRなどとした。

表1 地域共同研究一覧

	研究・事業内容(テーマ)	主担当	連携・協力組織	学内連携分野
①	都市型酪農における生産者によるバイオガス発生装置の製作とエネルギー利用方法の検討	井原一高	弓削牧場・NPO 法人 都市型農業を考える会	生産環境工学
②	稲木干しによる米の品質変化に関する調査	庄司浩一	篠山市福住地区の農家・めぶき農房・篠山東雲高等学校	篠山フィールドステーション 附属食資源教育研究センター
③	里山における薪生産再開にむけた予備調査	庄司浩一 黒田慶子	篠山市矢代地区青木ファーム	篠山フィールドステーション
④	日英の大学連携と学習ネットワークの形成	Luke Dilley 中塚雅也	英国ニューカッスル大学・CRE	地域連携センター
⑤	学内栽培果実を用いたスイーツの開発と広報方法の検討	布施未恵子 片山寛則	兵庫県まちづくり土木課・ささらい	地域連携センター 附属食資源教育研究センター
⑥	篠山市内の獣害対策促進に関する研究	布施未恵子	篠山市鳥獣害有害対策推進協議会	篠山フィールドステーション
⑦	域学連携による現地学習の効果と課題	藤原ひとみ	篠山市企画課	篠山フィールドステーション

① 都市型酪農における生産者によるバイオガス発生装置の製作とエネルギー利用方法の検討

都市型酪農を展開している弓削牧場(神戸市北区)は、1次産業(酪農)、2次産業(乳製品加工)そして3次産業(レストラン)を展開している。住宅地に近接していることから、家畜糞尿の環境対策が急務である。数年前より、臭気軽減とエネルギー回収を目的としてメタン発酵の導入を検討してきた。実際にプラントを建設するには高額な費用が必要になり、困難であった。本事業では、大学からの技術指導を基に、生産者自身がバイオガス発生装置を製作し、エネルギー利用を試みるものである。補助金によって装置を設置する例は多数あるが、生産者が装置を自作するという例は珍しい。エネルギー利用まで成功すれば、地域との新たな交流も期待できる。



② 稲木干しによる米の品質変化に関する調査

田園の稲木干し(はさがけ)は秋の風物詩である。近年ではコンバインの普及により、この特有の田園風景が変わってきたが、一方で「天日乾燥した米は美味である」との信念のもと、この手間のかかる作業を続けている農家もある。近年の技術改新により米の品質測定が手軽に行えるようになったことをうけ、刈取り直後と稲木干し後に脱穀した米の品質を改めて比較し、上記仮説の検証を行った。

篠山市内の3筆の水田内6か所から各20株を採取し、即脱穀と稲木干し後脱穀に分け、粒厚・真密度・玄米千粒重・登熟歩合・タンパク質/アミロース含有率・食味点・外観品質等を測定し比較した。またコンバインと食味測定器の普及時期に30年程度のズレがあり、上記のような検証報告が見られないことから、結果次第では学術論文としての公表も視野に入れている。

③ 里山における薪生産再開にむけた予備調査

来薪生産のために使っていた里山は、燃料利用が変化した半世紀間にわたって半ば放置された状態になっている。最近は薪燃料の見直しの機運があるが、特に薪として価値がある広葉樹類は放置によって大径化しており、作業技術の断絶とあいまって、伐採・運搬に問題を抱える農家が多い。そこで、里山を所有する農家に協力をお願いし、伐採後の運搬に関して斜面で中古コンバインの改造機を利用できるか試運転を行うとともに、引き続き資源量調査を行って伐採・運搬再開にむけたモデル作業を実施できるか調査する。当該機について、里山までの作業道を通行・旋回し、最大35度の斜面で運搬可能であることを確認した。針葉樹および広葉樹の里山およびその作業道の状態、薪として利用できる樹種や直径など、概況調査を行った。



④ 日英の大学連携と学習ネットワークの形成

英国ニューカッスル大学との連携の一環として、ポストドクターの研究者を受け入れた。その上で、共同研究プロジェクト実施にむた基礎的な調整をおこなった。また、農学研究科地域連携センターとニューカッスル大学農村経済センター（Centre for Rural Economy : CRE）のホームページの相互リンクを設定した。

また、CRE が中心となって推進する学習ネットワーク「Northern Rural Network」について事例調査をすすめ、その知見を生かして、篠山市を拠点に「Rural Learning Network」を立ち上げ、実践的比較研究として位置づけた。

⑤ 学内栽培果実を用いたスイーツの開発と広報方法の検討

フォーラムは共通の話題について情報を交換し合う会合となることが望ましいが、参加者の交流が不十分になりがちである。スイーツ等の食物をフォーラムで提供することで参加者の緊張をほぐし、ストーリー性のあるスイーツを提供することで、交流を促進するツールとなると考えた。そこで、丹波地域大学連携フォーラムの開催にあたり、スイーツ製作者・材料生産者どちらにとっても新たな資源発見の契機となるようなスイーツの開発を試みた。今回は、神戸大学農学部附属食資源教育研究センターで栽培しているぶどう（藤稔）を使って、篠山市内の料理店に新たな菓子を製作してもらった。今回は開発から取材を続け、スイーツの紹介ちらしを作製・配布し、よりよい提供の方法を検討した。



⑥ 篠山市内の獣害対策促進に関する研究

獣害問題は住民／行政／専門家の一丸となった対策（協働）が必要である。だが、三者の意識にずれが生じており、対策を行う人・物が不足している。篠山市では猿害が年々深刻になっており、現在もっとも有効な対策である追い払い技術の普及促進が課題となっている。そこで、篠山市で効果的な追い払い対策の事例収集と、効果的な追い払い対策の継続にはどのような支援が有効かという点について調査研究をおこなった。篠山市4集落への聞き取り調査から、自発的な対策活動は、「意識の高いリーダー」、「仲間の増加」、「問題意識の共有」という要因が影響していることが明らかになった。今後は、自発的な対策の仕組みが伝承されるような場づくりや、それらの活動を担う人材育成に関する研究をおこなっていききたい。

⑦ 域学連携による現地学習の効果と課題

篠山市と神戸大学農学研究科とで地域連携協定を締結し「篠山フィールドステーション」を拠点として、神戸大学全学を通じた連携活動を展開している。今回、①地域自治組織を受入単位として（作業は個別農家分かれる）、農作業等を通して農業・農村の実態を知ることとした「実践農学入門」、②その発展として、当該地域の課題解決を目的とした「実践農学」（計6回の現地実習）、そして継続的な関わりを促すことを目的とした「③農村ボランティア／食農インターン」を組み合わせた地域実践活動を行った。そうした個別の活動を共有する学習ネットワークとそのSNS ウェブサイトを開設することにより、地域と学生（農学部のみから全学へ展開）、そして大学教員・市役所職員などの相互学習の促進による地域発展という視点を新たに取り入れた実証研究をすすめた。

II 地域交流活動

1) 地域連携研究会（A-Launch）の開催

今年度は、これまでセミナー形式にて開催してきた「地域連携研究会」を、昼休みの時間をつかった地域連携トークイベント「A-Launch」として開催した。気軽に、幅広く、地域での実践活動や農学の先端研究・理論に触れる場となる機会を提供した。

表 2 A-Launch 実施の概要

日時	内容	話題提供者
第 1 回 10/12	「丹波の赤じゃが」誕生の物語	伊藤一幸 (神戸大学)
第 2 回 11/27	英国と日本の農村をつなぐ	Luke Dilley (神戸大学)
第 3 回 12/24	米国の農村における食料不安と肥満問題：現代の農業・食料が抱えるパラドックス	田中敬子 (ケンタッキー大学)
第 4 回 2/12	学生活動グループと地域づくり	中塚雅也 (神戸大学)



2) 学生地域活動サポート事業

今年度より学生の地域連携活動をサポートする「学生地域活動サポート事業」を開始した。この事業の目的は、農学部・農学研究科学生の地域の課題解決・価値創造につながる協働活動のサポートおよび、地域連携研究等の収集整理と情報公開（学内、地域、国際）の促進である。なお、農学部では、「実践農学入門」での地域体験学習を経て、表 3 に示す、4 つの学生団体が地域活動をおこなっている。なお、表 4 は今年度支援した事業の一覧である。

表 3 学生活動団体の概要

活動団体名	ささやまファン倶楽部	ユース六篠	はたもり	にしき恋
設立年度	H21 年度	H22 年度	H23 年度	H24 年度
会員数	23 名	10 名	35 名	38 名
活動地域	真南条集落	福住地区	畑地区	西紀南地区
代表者	松川尚平 (農学 B3)	長井拓馬 (農学 B3)	森田綾子 (農学 B2)	-
(次期 2013)	菅原将太 (経済 B2)	橋田薫 (発達 B2)	森田綾子 (農学 B2)	上田羊介 (農学 B1)
顧問	中塚雅也	宇野雄一	鈴木武志	杵本敏男
活動頻度	1 回/月	2 回/月	連休を利用した合宿形式	毎週末(予定)
定期的活動	<ul style="list-style-type: none"> 由利山の整備 地域の敬老会議への参加 運動会への参加 	<ul style="list-style-type: none"> 地域行事のスタッフ 農作業補助 さんば家ひぐちの駐在補助 	<ul style="list-style-type: none"> 地域行事のスタッフ 農作業の補助 	<ul style="list-style-type: none"> 地域行事のスタッフ 田畑管理・獣害対策 農作業補助
2012 年度主要活動	<ul style="list-style-type: none"> 東屋の建築 大学教員の地域活動との連携 	<ul style="list-style-type: none"> 定期的な活動による地域との関係の強化 地域イベントの企画 	<ul style="list-style-type: none"> 地域地図の作成 自作劇の発表 畑祭におけるイベント企画 	次年度以降活動開始

表 4 学生地域活動サポート事業

活動団体名	①ささやまファン倶楽部	②ユース六篠	③はたもり
サポート事業名	由利山開発プロジェクト	「農」の現場を知る ～福住の活動を通して	畑地区を盛り上げる会
連携・協力組織	真南条上営農組合真南条 上地区	福住プロジェクト 2030	みたけの里協議会

①ささやまファン倶楽部 由利山開発プロジェクト

少子高齢化・過疎化の進んだ篠山市真南条上集落には「農で真南条を盛り上げよう」をテーマに、地域づくりに取り組む方々がいる。この取り組みのなかで、特に人手が必要な由利山（真南条上の放置里山林）の整備活動を手伝った。今年度は、整備活動に加え、地域の方々が主催する「真南条を考える会」に参加し、由利山を「子供が遊びにくる山」にするという計画を提案した。今年度はその計画の一部である東屋の製作補助に取り組んだ。都会ではできないことができる農村の魅力を伝える場となるよう、神戸大学生だけでなく一般の方々の参加も歓迎している。



②ユース六篠 「農」の現場を知る-福住の活動を通して-

農業農村フィールド演習（H22年度）、実践農学（H24年度）などの授業を通して「高齢化」「過疎」「獣害」等の問題が相互に関係していることに気が付いた。だが、授業の限られた時間のなかでは解決に至らない場合が多い。そこで、与えられた課題ではなく、自身で考え行動する力を養うため、地域住民の方々との交流を通して学生がボランティアとしてできることを考え、それを実践すること目的として篠山市福住地区で活動をおこなった。また、農村の現状や課題を学内外のより多くの人に知ってもらい、意識を持ってもらうことも、目的としている。具体的には、「農作業のボランティア」「地域イベントへの参加・企画」「活動交流拠点への駐在」などを行った。



③はたもり 畑地区を盛り上げる会

平成 23 年度実践農学入門という授業で畑地区にお世話になり、過疎化・高齢化による課題を抱えていることを知った。特に、畑にとって最大の行事である“はた祭り”は、年々規模が縮小し、存続が危ぶまれている。祭は畑の大切な文化・伝統であり、村から出ていった人に帰ってきてもらうきっかけにもなり得る重要なものである。そこで、はたもりでは、祭を盛り上げ、少しでも多くの方に畑地区を訪れてもらえるような企画を提案・実行した（オリジナルの祭手ぬぐいのデザイン、スタンプラリー、記念写真用のパネル、等）。また、畑の地域資源である寺・神社・城跡などの歴史遺産をアピールするマップ作りを通して、学生という視点で畑の魅力を見つめ直し、住民の方に地元のよさを知っていただき、住民の方自らが畑を盛り上げていけるようなきっかけをつくる。



3) 農村地域学習ネットワーク（Rural Learning Network）の構築

農村地域（丹波をはじめ北近畿などを中心）の発展の学習の場づくりとして農村地域学習ネットワークを構築し、運営を支援している。このネットワークは、1) 地域の問題や取組実態の理解、2) 先進的・革新的な取組や技術の共有、3) セクターと地域を越えたネットワークづくり、4) 現場発の政策、事業、研究の形成、の場となることを目的としている。

■ 実施体制

NPO、行政、民間、大学等の有識者からなる編集委員のもと、運営事務局が実務的な企画運営を担う（事務局は神戸大学篠山フィールドステーションにおく）。

編集委員（ステアリンググループ）：金野幸雄（一般社団法人ノオト代表）・小橋昭彦（NPO 法人情報社会生活研究所 代表）・高嶋正晴（立命館大学准教授）・土性里花（篠山市民センター）・西村いつき（兵庫県）・馬袋真紀（朝来市）

運営事務局：中塚雅也（神戸大・農学部）・内平隆之（兵庫県立大・エコヒューマン連携センター）・高嶋正晴（立命館大学）・竹見聖司（篠山市）・出町慎（関西大・青垣スタジオ）・山崎義人（兵庫県立大/人と自然の博物館）・布施未恵子（神戸大・篠山フィールドステーション）・藤原ひとみ（神戸大・篠山フィールドステーション）

■ 実施内容

以下のようなテーマでセミナーを計8回実施した（表5）。

表5 セミナーの内容

日時	テーマ	話題提供者	所属
第1回 5/25	地域多様性：なぜ農村は多様でないといけないのか	河本大地	神戸夙川学院大学観光文化学部
第2回 6/23	林業再生：地域のお金を回し、森を活かす方法とは	牧 大介	(株)西栗倉・森の学校
第3回 7/16	獣害対策の問題：何を变える必要があるのか、何をすればいいのか	鈴木克哉	兵庫県立森林動物研究センター
第4回 8/10	古民家再生、農地活用の創造的手法とは？	金野幸雄	一般社団法人ノオト
第5回 9/6	歴史資料の扱い方・地域づくりへの活かし方	板垣貴志 坂江渉	神戸大学大学院人文学研究科
第6回 11/26	森から考える新エネルギー：森林資源の地域循環は可能か？	能口秀一	有限会社 ウッズ
第7回 1/11	まちとむらの‘学び’を考える（元町カフェとのコラボ）	高橋桐子 中塚雅也	兵庫県自治研修所 神戸大学
第8回 3/9	農業多様性：環境創造型農業を地域でひろげるには？	西村いつき	兵庫県農政環境部



4) 「鹿児島カレッジ」への参加

「鹿児島カレッジ」は、鹿児島県の観光地にて、大学生が地元の方々との交流を通じてさまざまな体験を行い、旅の素晴らしさを発見・情報発信するプログラムである。農学研究科地域連携センターで募集した学生計7名（食料経済学4回生2名・3回生2名、応用動物学3回生1名、応用植物学3回生1名、発達科学部4回生1名）が参加した。主催：観光かごしま大キャンペーン推進協議会、協力：西日本旅客鉄道株式会社



■ 実施スケジュール

- (1) Facebookによる情報発信：平成24年7月11日から
- (2) 体験実習：平成24年9月3日から9月6日
- (3) 中間報告会：平成24年10月27日
- (4) 成果報告会：平成24年11月22日

■ 参加大学

大阪大学・関西大学・神戸松蔭女子学院大学・神戸大学・岡山大学・広島経済大学

参考資料

鹿児島カレッジ Facebook 公式 URL <http://www.facebook.com/kagoshimacollege/>

5) 国際地域連携ネットワークの構築

地域連携センターでは、地域の発展に関して海外の研究者やグループとパートナーシップを築く努力を続けている。国際的な連携や協力は、現代における地域の抱える様々な問題解決や発展にとって重要である。それは国際的な視点による思考や知識であり、国際連携は今後の持続可能な農村地域の発展に向けての第一歩である。本年度は、主には次の3つの事業を実施した。

- ・英語のホームページの立ち上げ
- ・ニューカッスル大学 (Centre for Rural Economy) との HP 上のリンク
- ・日本と英国の地域発展に関する比較研究プロジェクト



6) 加西市、三木市等との包括連携推進

既に包括協定を結ぶ加西市とは、活動拠点づくりなど、連携強化にむけての協議、学習会をおこなった。

三木市とは、包括協定の締結にむけて、具体的な事業内容について、協議をおこなった。当面は、次に示す「農村地域学習ネットワーク」を三木市内においても創出することを目的とした。

7) 食農コープ教育プログラム支援事業

食農コープ教育プログラムの一環として位置づけられている農村ボランティアと農村インターンシップについて支援を行っている。

■ 農村ボランティアバンク KOBE（ノラバ）の運営支援

H25年3月現在の会員総数は、受入農家19軒、登録ボランティア338名である。そのうち、学生は129人、一般が209名に拡大した（表6）。

本年度は、のべ21件のマッチングがあった。合計8名のボランティアを通して農業・農村支援を行った。このうち一回以上参加したのは3名であった。

表6 新規登録者数推移（2013年3月現在）

	H19年度	H20年度	H21年度	H22年度	H23年度	H24年度	合計
学 生	4	31	26	20	37	11	129
一般市民	3	25	64	50	41	26	209
合 計	7	56	90	70	78	37	338

広報活動として、徹夜祭（学園祭の前夜祭）に参加した。目的として参加した主にノラバの活動を学園祭の。昨年課題として挙げていた「ノラライターと農家との交流深化につながるイベントの企画不足」を受け、今年度は篠山の若手農家との交流を目的とした「座談会」を同時に企画した。十数人の学生・社会人と、農家が、農業について活発に意見を交わすことのできる場を創ることができた。



■ 農村インターンシップの運営支援

学生が一定期間、食と農の現場（食と農に関係する企業や行政機関、農家や農村のグループ）で研修生として働くことを通して地域の課題にチャレンジし、技術や専門知識を深めるとともに、将来の夢やキャリアを考える機会とすることを目標としている。

連携センターではこのインターンシップにおいて受け入れ窓口とその運営を支援しており、受入先と学生のマッチングや事前事後のカウンセリングなどを行っている。受入先は表7のとおりである。



表7 農村インターンシップの受入状況

	受け入れ先	実施日程	学年・人数
1	徳島県(トマト農家)	9/17～23	2回生1名
2	〃	9/17～23	2回生1名
3	徳島県(直売所経営)	9/6～12	3回生1名
4	篠山市(地産地消レストラン)	9/9・10	3回生1名

III 相談・情報発信

1) ホームページ等による情報発信

地域連携センターHP (<http://kobe-face.jp/renkei/>) で、共同研究の内容や地域交流イベントの告知・レポートなどの情報を発信したほか、食農コープ教育プログラム HP (<http://www.kobe-face.jp>) ではプログラムを受講する学生の声を発信した。また学生たちがより日常的に連携センターの情報にふれることができる twitter (@agregion) による情報発信もおこなっている。



2) オフィスアワーの実施

地域と農学研究科を繋ぐ窓口として、情報の受発信を行い各種相談に答えるため毎週水曜日にオフィスアワーを実施している。本年度は地域連携センターと篠山ワールドステーションで合わせて、75件(H25年1月末集計分)の相談が寄せられている。

3) 講演

地域連携センターに関わる教員・スタッフが依頼された講演は次のものである。

- 川西市「生涯学習短期大学レフネック」第18期「農学科」への協力、講師派遣
- その他

- ・岡田文子「大学での研学生活と大学受験について」兵庫県立篠山鳳鳴高等学校 (H24.12), 参加人数 46名
- ・中塚雅也「食の連携による地域づくり」加東健康福祉事務所, 兵庫県健康財団北播磨支部, 北播磨給食施設協議会 (H25.1), 参加人数約 150名



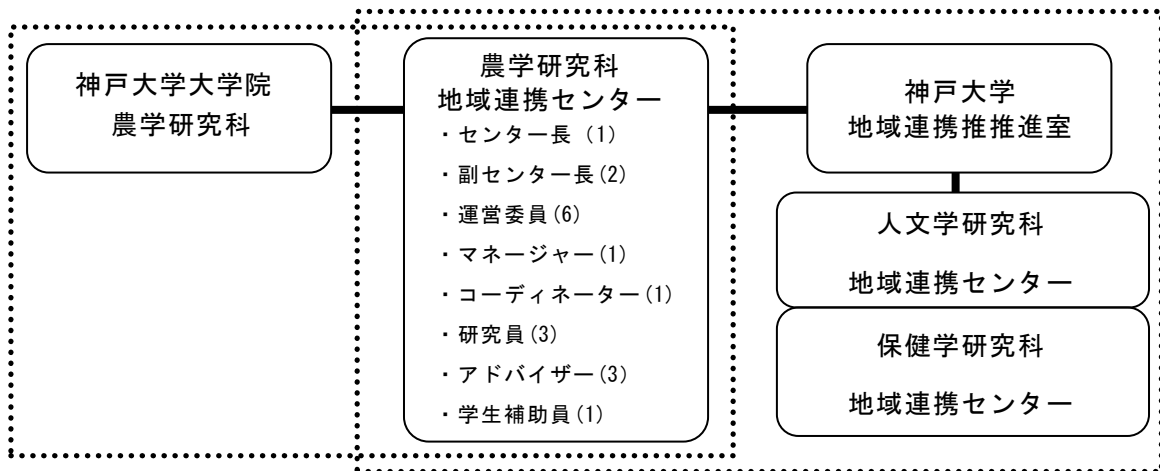
組織体制

1) 名称

神戸大学大学院農学研究科地域連携センター

2) 組織

農学研究科（農学部）および神戸大学地域連携推進室の協力のもと、センター長と副センター長を中心に、運営委員会がボードの役割を果たし、教育研究スタッフ、事務スタッフ、学生ボランティア等が協働で事業を推進する。



3) 住所・連絡先

住所： 〒657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1 A106
電話/FAX： 078-803-5939（オフィスアワー：水曜日 13時～16時）
Email： ans-chiiki@edu.kobe-u.ac.jp

4) H24年度スタッフ

センター長	高田理（食料生産管理学 教授）
副センター長	杵本敏男（植物栄養学 教授）・中塚雅也（食料経済学 准教授）
運営委員	庄司浩一（生産システム工学 准教授）・中塚雅也（食料経済学 准教授）・原山洋（生殖生物学 准教授）・石井弘明（森林資源学 准教授） 大野隆（環境分子物理化学 教授）・杵本敏男（植物栄養学 教授）
マネージャー	中塚雅也（食料経済学 准教授）
地域連携コーディネーター	松原茂仁（～7月）・溝口尚子
地域連携研究員	ルーク ディレイ・布施未恵子（篠山フィールドステーション）・藤原ひとみ（篠山フィールドステーション）
相談役	加古敏之（神戸大学名誉教授）・伊藤一幸（熱帯有用植物学 教授）・内平隆之（兵庫県立大学環境人間学部 講師）
学生補助員	岡田文子（環境生物学）